The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マグネシアのアシュリアと国家間関係
Author(s)	中尾, 恭三
Citation	パブリック・ヒストリー. 2012, 9, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public (2012) **9**, pp 15-28 ©2012 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Reciprocity and Social Order in Historical Context: 2- Magnesian *Asylia* and Interstate relationship
Kyozo NAKAO

特集　社会秩序と互酬性　2

マグネシアのアシュリアと国家間関係

中尾恭三

はじめに

ヘレニズム時代の古代地中海世界は、ポリス、連合、王朝が重層的に共存する世界であった。同時代人によって「ポリス」と呼ばれる政治組織であっても、王朝に従属するものもあれば、広範な自治を有し他のポリス、王朝と独自に交渉をおこなうものもあった。他方でポリスとしての自立性を維持しつつも、複数のポリスとゆるやかな連合を形作っていたものもあった。このように重層的な政治的関係が形成されていたヘレニズム時代では、国家間の交渉も多面的であった。ポリスを越えた交易活動、エリート間の紐帯から、ポリス、連合、王朝間の外交といった公私にわたる記録が残されている。とりわけ国家間の交渉を伝える史料は、同盟締結、第三国による紛争仲裁、外国人裁判人の顕彰、イソポリテイア条約、シュンポリテイア条約など多岐にわたる。その中でも、この時代にはじめて史料にあらわれるようになり、数多くのポリスで碑文に記録されたのがアシュリア（不可侵）条約であった。

アシュリア条約とは、ある国が特定のポリス、領域、神殿を不可侵と認めることを定めた 2 国間の条約である。アシュリアを求めるポリスが、諸ポリス・連合・王に対して使節を派遣し、彼らを受け入れた国家が決議を下すことによって認められた。アシュリアは、あくまで 1 対 1 で締結される条約であった。このアシュリアに関して包括的な分析と史料収集をおこなったのが、リグズビイである。(1) その後、彼の研究を批判・発展させるかたちで、いくつかの論考が公刊されている。(2)

アシュリアとその形容詞アシュロス (ἄσυλος/asylos) は、本来専門的な用語ではなかった。前 5 世紀コリントス近郊に建てられていた神殿の境界石に「[神聖 ?] かつアシュロスな [石 ?]。

(1) Kent J. Rigsby, Asylia: *Territorial Inviolability in the Hellenistic World* (= Rigsby, Asylia), Berkley, 1996.

(2) ブラセリスは、コスに対するアシュリア付与を第 3 次シリア戦争後の国家間関係の変化に求めた。クレタ島の諸ポリスがテオスに認めたアシュリアを長期的・短期的戦略として分析したのが、クヴィストである。Cf. Kostas Buraselis, 'Some Remarks on the Koan *Asylia* (242 B.C) against its International Background', Kerstin Höghammar (ed.), *The Hellenistic polis of Kos: state, economy and culture: proceedings of an international seminar organized by the Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University, 11-13 May, 2000*, Uppsala, 2004, pp. 15-20; Kristen Kvist, 'Cretan Grant of *Asylia*- Violence and Protection as Interstate Relations', *Classica et Mediaevalia* 54, 2003, pp. 185-222.

侵すべからず。罰をあたえる」と刻まれているのが、現存する最古の事例の1つとみなされている。[3] 神殿、領域、ポリスの「不可侵」を意味する用語として国家間の条約において用いられるようになったのは、前3世紀にはいってからになる。碑文史料で確認されるアシュリア条約の最も古い例は、前266年ないし前262年にデルポイの神聖同盟（ἀμφικτύονία/amphiktuonia）が、アテナ・イトニア神殿に認めたものである。[4] 神殿は中部ギリシアのボイオティア地方コロネイア近郊に位置していたが、碑文そのものはデルポイのアポロン神殿に建立されていた。そこには「コロネイアのアテナ・イトニア神殿は不可侵と神聖同盟によって決議された」と刻まれている。[5] このアテナ・イトニア神殿は、ボイオティア連合の宗教的中心地として有名であり、祝祭はボイオティア地方全域から参加者を集めた汎ボイオティア的なものであった。碑文には、この決議をおこなった同盟会議への参加者とこの決議内容が記録されているのみである。[6] そのため、いかなる経緯でこの神殿にアシュリアが認められたのかは詳細を知ることはできない。しかしながら、ボイオティアの諸ポリスのみならず、アイトリア、テッサリア、ポキスといった周辺地方のポリスが参加するデルポイの神聖同盟によってアシュリアが認められたことは、この祝祭がボイオティア地方を越えた中部ギリシア地域における大祝祭として成長する可能性を高めたであろう。

この事例以降、神殿のみならずポリスや周辺領域に対してアシュリアを認める事例が見られるようになり、アシュリアが外交の1手段として確立されていく。とりわけ、前242年にエーゲ海コス島のアスクレピオス神殿に対して認められたアシュリア、前208年に小アジアのマグネシアのポリスと領域に対するアシュリア、前203/2年頃に同じく小アジアのテオスに対するアシュリアに関してまとまった史料が現存している。本稿では、マグネシアに対するアシュリアをとりあげ、ヘレニズム時代の諸国家が、多様な戦略を用いて交渉を試み、それが国家間の紐帯を再生産・維持していく過程を論じていく。

1　事件の背景と先行研究

前208年、小アジアのイオニア地方マイアンドロス河畔のマグネシアのポリスとその領域に対するアシュリアと、市内のアルテミス・レウコプリュエネ神殿で開催される祝祭がピュティア祭と同等の地位にあることが、諸ポリス・諸王から承認された。[7] マグネシアは小アジアの

(3)　Benjamin D. Meritt (ed.), *Corinth: The Greek Inscriptions 1896-1827*, vol.VIII, part 1, 22.

(4)　年代推定については、Rigsby, Asylia, p. 57-58を参照。

(5)　*Supplementum Epigraphicum Graecum* (= *SEG*), 18.240, ll.11-14.

(6)　この時の同盟会議には、ヒエロムネモネス（οἱ ἱερομνήμονες/*hoi hieromnemones* アンピクチュオニア会議代表）としてアイトリア人6名、ボイオティア人2名、ポキス人3名、アテナイ人1名、ヒスティアイア人1名、デルポイ人2名、書記官としてアイトリア人1名が出席していた。Cf. *SEG*, 18.240, ll.2-11.

(7)　アルテミス・レウコプリュエネの神域に言及している最も古い文献史料は、クセノポン『ヘレニカ』3巻2章19節である。考古学的な調査では、ヘレニズム時代のアルテミス神殿の下から、前6世紀前半にまで遡る遺構が発見されている。cf. Morgen H. Hansen and Thomas H. Nielsen (eds.), *An Inventory of Archaic and Classical Poleis*, Oxford, 2004, no. 852, Magnesia.

有数のポリスであったエペソスとプリエネに近く、肥沃な土地として知られていた。[8] この事例を記録する碑文は 60 点以上現存しており、祝祭創設に関する縁起譚、マグネシアから派遣されてきた使節団の要請に関する各ポリスの決議、王の返答を記録している。碑文の残存状況からマグネシアによるアシュリア要請に対して、およそ 200 のポリスおよび王による返答がなされたと考えられている（表を参照）。[9]

マグネシア人が残した縁起譚によると、事件の経緯は次のようなものであった。[10] 前 221 年マグネシアにアルテミス・レウコプリュエネが顕現した。マグネシア人はデルポイのアポロン神殿に使者を派遣してアポロンの神託を受け、祝祭を創設することを決定した。彼らは諸ポリス、諸王に使節を派遣し、アルテミスの祝祭がパンヘレニック祭典であったピュティア祭と同等のもの（ἰσοπύθιος/isopythios）であることとともに、ポリスとポリスに付随する土地のアシュリアを認めることを同時に求めた。しかしながら、この時アシュリアはすべてのポリス・王によっては認められず、それから 13 年の時を経て前 208 年にようやくアシュリアが広く認められた。史料にあるように 221 年に使節派遣がおこなわれたかどうかは不明だが、すくなくとも前 208 年に大規模な使節派遣がおこなわれ、諸ポリスおよび王からの返答があったことは間違いない。[11]

このマグネシアのアシュリア要請に対して、すべてのポリス、王が同じ返答をしたわけではなかった。すなわち、祝祭をピュティア祭と等しい地位にあることを認める一方で、アシュリアに関しては何の返答も得られなかった場合がある。ペルガモンのアッタロス 1 世、シリアのアンティオコス 3 世と彼の息子アンティオコス、アルゴス、シキュオン、カルキス、デロス、ロドス、ペルシスのアンティオキア、アイトリア連合、デルポイ、アッタロス 1 世支配下の 1

(8) 小アジアには、マグネシアと名づけられたポリスがふたつ存在していた。ひとつはこのマイアンドロス河畔のマグネシアであり、もうひとつはリュディア地方のシピュロス山に面したマグネシアである。本稿では、マイアンドロス河畔のマグネシアのみを取り扱うため、以後マグネシアと表記するにとどめる。

(9) Rigsby, Asylia, p. 180.

(10) Rigsby, Asylia, 66.

(11) 前 221 年の使節派遣を否定する見解については、Joshua D. Sosin, ‘Magnesian Inviolability’, *Transaction of the American Philological Association* 139, 2009, pp. 372-385 を参照。

ポリスからの返答がそれにあたる。[12] たとえば、アンティオコス3世は、自らと支配下にある諸ポリスが、アルテミスの競技会をピュティア祭と同等と認めると返答しているが、アシュリアに関しては何も言及していない。ペルガモンのアッタロス1世も同様である。[13] 他方で、エジプトのプトレマイオス4世、アイトリア連合、ボイオティア連合などは、アシュリアも認める旨返答している。[14] このように各ポリス・王からの返答を記録した碑文には、その内容に相違がみられる。

ソシンは、マグネシアから各地に派遣された使節を分類し、個々の使節によって要求された内容に相違があった可能性を示唆している。[15] 彼は碑文から確認される限りにおいて複数のポリス・王へ派遣された使節団は8組であり、個々の使節団は各ポリスに対して異なった要求をしたとみなしている。[16] アテナイと周辺地域に派遣された3人の使節は、アテナイ、ボイオティア連合、ポキス連合、エレトリアに、祝祭がイソピュティオスであることに加えて、ポリスと領土のアシュリアを認めるよう要請しているが、カルキスに対してはアルテミス・レウコプリュエネに捧げられた名誉を承認するよう求めるに止まっている。[17] ペロポネソス半島の諸ポリスを中心に巡回した使節も同様である。メガロポリス、アカイア連合、メッセニアの決議碑文では、彼らは神聖休戦、祝祭のイソピュティオス、ポリスと領域のアシュリアを要請している。他方、

---

(12) Rigsby, Asylia, 68（ペルガモン）; Rigsby, Asylia, 69, 70（シリア）; Rigsby, Asylia, 90, 91（アルゴス、シキュオン）; Rigsby, Asylia, 97（カルキス）; Rigsby, Asylia, 99（デロス）; Rigsby, Asylia, 104（ロドス）; Rigsby, Asylia, 111（ペルシスのアンティオキア）; Rigsby, Asylia, 78, 79（アイトリア連合、デルポイ）. なお、アイトリア連合による別の決議を記録した碑文にも、アシュリアに関する言及がみられる（*Inscriptiones Graecae*(= *IG*) IX. I^2 4.c =Rigsby, Asylia, 67)。そこでは、ナウパクトス人アゲラオスがアイトリア連合の将軍であった年に、マグネシアから使節が訪れたこと、マグネシアのポリスと土地が神聖不可侵であることが決議されている。現存する文献史料では、アゲラオスは前217/6年と前206/5年に将軍であったことが記録されているのみである (Polybios. 5.107.6; *SEG*, 38.1476, l.79)。他方で、マグネシア人が神託を下されたのが第140回オリュンピア競技会（前221/0年）の前年であり、マグネシア人の記録とアイトリア連合からの応答を記録する碑文に年代の相違が生じてしまう。すなわちマグネシア人の記録によれば、使節を派遣したのは前221年と前208年の2度であるが、アイトリア連合からの返答を記録した2碑文では、アゲラオスが将軍の年（前217/0年ないし前206/5年）と前208年に属することになるのである。ポリュビオスは、前221/0年の将軍としてアリストンの名を挙げており、同年にアゲラオスが将軍の職にあったことを示唆する史料はない。リグズビイは、アイトリア連合の将軍は秋から夏にかけて在職するため、アゲラオスが2度目の将軍職にあった年を前222/1年と推定し、就任期間の最後の月（前221年夏）にマグネシアに対してアシュリアを認めたとみなしたのである。しかしこれは史料間の整合性をもたせるために、強引な解釈をしていると判断せざるをえない。ソシンはリグズビイの見解を退け、アイトリア人は前208年にマグネシアでの競技会がイソピュティオスなものであると承認し、その2年後の前206/5年アゲラオスが2度目の将軍職にあった年にマグネシアのポリスと土地を神聖不可侵と追加で認めたと解釈している。本稿では、ソシンの見解にしたがう。Cf. Rigsby, Asylia, pp. 190-192; Sosin, op.cit., 372-377.

(13) Rigsby, Asylia, 69; Rigsby, Asylia, 68.

(14) Rigsby, Asylia, 71（プトレマイオス4世）; Rigsby, Asylia, 73（ボイオティア連合）; Rigsby, Asylia, 67（アイトリア連合）.

(15) Sosin, op.cit., pp. 385-406.

(16) John Ma は少なくとも20組のテオロイが派遣されたと推測している。Cf. John Ma, 'Peer Polity Interaction in the Hellenistic Age', *Past & Present* 180, pp. 12-13.

(17) Rigsby, Asylia, 73, ll.12-17（ボイオティア連合）; Rigsby, Asylia, 84, ll.10-14（ポキス連合）; Rigsby, Asylia, 87, ll.15-20（アテナイ）; Rigsby, Asylia, 97, ll.15-17（カルキス）; Rigsby, Asylia, 98, ll.8-11（エレトリア）.

コリントスの碑文では祝祭に関する事項を要請したことが記録されるのみに止まる。[18] ではなぜこのような差異が生まれたのであろうか。ソシンは、事務的な問題として解釈している。すなわち、およそ 200 ものポリス・王に使節団を派遣するにあたって、個々のポリスや王の前で読み上げるための演説を起草しなければならなかった。これは個人では到底準備することができず、複数の集団に仕事がゆだねられたであろう。そのため、ある演説文では詳細な内容が書き上げられ、また別のものでは簡略化された演説が組まれた。このように演説中で要請された事項に差異が生じたため、諸ポリスと王からの返答にも差異が生じる結果となった。このように、要請と返答の相違は、政治的なものではなく、単に事務的・行政的な問題に起因するのだと彼は論じている。[19] 果たしてそうであろうか。

2　アシュリアによって生まれるポリス間関係

自国が主催する祝祭を新たに創設し、それをピュティア祭と同等のものと認めてもらうよう 200 を超えるポリス・王に使節団を派遣するのは、国家を挙げた一大事業であったことは疑問の余地がない。さらには、ポリスと周辺領域のアシュリアまでも含めるのであればなおさらである。その使節が持参する演説文を起草するにあたって、事務的・技術的な問題が原因で内容に大きな相違が生じたのであろうか。この事例から数年後、前 203/2 年に小アジア沿岸のポリスであったテオスがアシュリアを求めた際には、他ポリスと共有する文化的基盤を意図的に活用していた。テオス人は、ポリス相互の親密な結びつきを強調することによって、相手ポリスから肯定的な応答を得ようと試みていたとみなし得る。諸ポリスは宗教的、政治的、経済的に重なり合った多層的な結びつきを有しており、ポリス同士の関わりとその密度は個々のポリスにおいて異なっていた。たとえ地理的に遠方に位置するポリス同士であっても、祝祭への参加、テオロイ（οἱ θεωροί/hoi theoroi、神聖使節）の遣り取りに代表される宗教的結びつき、その他政治的、経済的な関係が密であれば、心理的な距離は近いものであったということができる。地理的な地図とは異なる「精神的地図」を諸ポリスは持っていたのである。[20]

マグネシアから諸ポリス・王への要請が異なっている 1 つの要因は、この「精神的地図」に基づき、各ポリスとのつながりの強度を考慮に入れて草稿を作成したことに求められるのではないだろうか。メガロポリスの決議碑文でマグネシア人使節は、およそ 150 年を遡る前 369 年、都市メガロポリス創設にあたって、マグネシアが 300 ダレイコスの金を援助したことに言

(18)　Rigsby, Asylia, 88, ll.13-18（メガロポリス）; Rigsby, Asylia, 89, ll.15-20（アカイア連合）; Rigsby, Asylia, 92, ll.6-10（コリントス）; Rigsby, Asylia, 93, ll.16-21（メッセニア）. なお、彼ら 3 人はアルゴス、シキュオン、その他名称が不明な 2 ポリスの決議碑文でも、使節として訪れたことが記録されているが、これらの碑文からは彼らがどういった要請をおこなったのか判断することはできない。Cf. Rigsby, Asylia, 90（アルゴス）; Rigsby, Asylia, 91（シキュオン）; Rigsby, Asylia, 122（不明）; Rigsby, Asylia, 124（不明）.

(19)　Sosin, op.cit., pp. 396-397.

(20)　ポリス間の結びつきを強化するはたらきをもった諸要素については、Ma, op.cit., pp. 15-23 を参照。

及している[21]。このような過去の関係を想起させることは、メガロポリスから肯定的な返答を得るための強力な武器となったであろう。その他、使節団はシュンゲネイア（ἡ συγγένεια/he sungeneia、神話的・擬似的親族関係）、旧来の友好関係など派遣されたポリスに応じた自国との結びつきに言及している。とりわけ頻繁に挙げられるのが、ポリス同士の親族関係である。このように、決議碑文から読み取れる使節の要請に差異が生じている理由の 1 つとして、マグネシアが従来のポリス間の関係を意識して活用したためだと考えたほうが妥当であろう。

派遣された使節団は、単に与えられた草案を読み上げるだけで、なんのイニシアチブももたなかったのであろうか。彼ら使節団はマグネシアの有力者として派遣され、訪れたポリスにおいても、テオロドコイ（οἱ θεωροδόκοι/ hoi theorodokoi、使節歓待役）に任命されたその地の有力な市民によって歓待されていた[22]。複数のポリスでテオロドコイが選出されていたことがその証左となろう。それに加えて、使節がポリスのプロクセノイ（οἱ πρόξενοι/ hoi proxenoi）に指名された事例も存在する[23]。古代ギリシアには、あるポリスが自国の利便を図ってもらうことを目的として、他ポリスの市民をプロクセノイとして任命する慣習があった。プロクセノイに任命された人物は、自身が所属するポリスと指名したポリスとの相互関係を円滑に運ぶ役割を担い、その見返りとして相手ポリスから、市民権、免税、劇場での特等席、民会での発言権といった特権を授けられた[24]。プロクセノイに指名された人物は、ポリス内部での広い人脈を維持していた富裕な有力者であったであろうし、政治的結びつきのみならず、交易を通じてポリス間の経済的な紐帯をも形成していた。同様に前 208 年に使節として派遣されたのは、その後もポリス間の外交関係を主導していくことを期待された人物たちだったとみなしてよい。

さらに、民会の場で演説をする人物には、高いプレゼンテーション能力も要求された。多くのポリスは、アテナイのように民会を開催する特別な場所をもたず、集会は主に劇場で開催されていた。発言者は、劇場に集まった人びとの前で、弁論術、表情、身振り手振りといったさまざまな技法を駆使して演説を披露しなければならなかった。民会演説は、演劇としての要素を持っていたのである。民会と法廷における弁論術の発展は、前 5 世紀後半以降アテナイにおいて顕著な現象であった。カニオティスは、ヘレニズム時代において身振り、手振りをも加え

---

(21) Rigsby, Asylia, 88, ll.25-29. ダレイコスはペルシア金貨の単位。

(22) 祝祭の開催に先立って、祝祭を主催した地域からテオロイが派遣された。彼らテオロイは、祝祭と神聖休戦の開始を布告するために各ポリスに赴き、彼らを受け入れたポリスではテオロドコイと呼ばれる人々が歓待をした。テオロドコイは、ポリスの市民の中でも名声ある有力者が就任し、その職務はしばしば世襲されていた。Cf. Irad Malkin, *A Small Greek World: Networks in the Ancient Mediterranean*, Oxford, 2011, pp. 20-21.

(23) Rigsby, Asylia, 77（カリュドン）; Rigsby, Asylia, 81（アカルナニア連合）; Rigsby, Asylia, 82（エペイロス連合）; Rigsby, Asylia, 84（ポキス連合）; Rigsby, Asylia, 85（サメ）; Rigsby, Asylia, 86（イタカ）; Rigsby, Asylia, 95（アポロニア）; Rigsby, Asylia, 96（エピダムノス）; Rigsby, Asylia, 98（エレトリア）; Rigsby, Asylia, 100（パロス）; Rigsby, Asylia, 109（リュコス川沿いのラオディケイア）.

(24) ヘレニズム時代のプロクセニアの発展については、Grey Reger, 'Hellenistic Greece and Western Asia Minor', Walter Scheidel, Ian Morris, Richard Saller (eds.), *The Cambridge Economic History of the Greco-Roman World*, Cambridge, 2007, pp.473-474 で簡潔に論じられている。デロス島に限定されるが、リーガーは外国人による交易活動、プロクセノイ指名、顕彰との関係について詳細に論じている。Cf. Grey Reger, *Regionalism and Change in the Economy of Independent Delos, 314-167 B.C.*, Oxford, 1994, pp. 63-75.

た弁論術がさらに発展し、ギリシア各地で意識的に活用されていったと論じている。[25] そのため、マグネシアから派遣された使節が、単に与えられた原稿を読み上げるだけであったとは考えにくい。彼らは自国マグネシアと相手ポリスとの関係を熟知し、事前に演説を準備し、滞在ポリスの市民に最もよく働きかける効果をもった演説ができる人物であったか、少なくともそうすることが期待された人物であったであろう。そのため彼ら使節は、高度な教育と訓練を子弟にあたえることができた富裕なエリート家系の出身者であった蓋然性が高い。いくつかの史料で、親族とみられる人びとがともに使節として名前が挙げられていることが、それを物語る。サメ、イタカ、コルキュラ、アポロニア、エピダムノスに派遣されたソシクレスとアリストデモスは、父親の名前がディオクレスと共通しており、おそらくは兄弟か親戚関係にあったであろう。後者のアリストデモスは、デルポイ、アカルナニア連合、エペイロス連合の下へも派遣されており、彼が使節として大いに期待されていたことをうかがわせる（表を参照）。その他にも、ペロポネソス半島の諸ポリスをめぐったピリスコスとランペトスの父親もピュタゴラスであり、彼らも親族関係であったのかもしれない。使節は富裕家系の出身の高い教養を身に着けた人物であり、エリート間の社会的紐帯も交渉において大きな役割を果たしていたにちがいない。

他方で碑文に刻まれている内容が、各ポリスによる決議か王からの書簡であったことも見逃してはならない。碑文そのものはマグネシアのアゴラを囲む壁に記録されており、マグネシア人が残したものである。[26] しかし、碑文の内容はあくまでも、マグネシアの使節を受け入れたポリス・王が何を決定したのかに眼目がある。そのため、碑文にはポリスと王の意図が反映されていることは明らかである。それは、マグネシアから訪れた人物たちを、各ポリス・王が何の使節として迎え入れたのかからうかがい知ることができる。宗教使節のテオロイに対して、宗教性をともなわない外交使節はプレスベイス（οἱ πρέσβεις/hoi presbeis）とあらわされる。マグネシア人使節団を受け入れたポリスの決議碑文において、彼らをテオロイと呼ぶか、プレスベイスと呼ぶのかに相違がみられる。使節をテオロイとして迎えたポリスは、碑文から読み取れる限りでは 44 ポリス。その中でも、テオロイを歓待する役割を担ったテオロドコイを市民から選出していることが分かるポリスは 20 ポリスであり、使節はテオロイと表記されるか、プレスベイスとテオロイ双方の記述がある。残存している碑文の状況からはプレスベイスしか読み取れないが、テオロドコイを指名したのではないかとみられるのが 1 ポリス。[27] さらに、使節の判別はできないが、テオロドコイについて言及しているのは 3 ポリス。そのほか、碑文の状況から判読できないものを除いて、使節をプレスベイスとして受け入れたポリスでは、テオロドコイは指名されていない（表を参照）。

他方で、テオロイとして受け入れられた使節に、テオロドコイが当てられない場合もあっ

(25) Angelos Chaniotis, 'Theatrically Beyond the Theater. Staging Public Life in the Hellenistic World', *Pallas* 47, 1997, pp. 219-259. 劇場でおこなわれていたさまざまな儀礼については、Angelos Chaniotis, 'Theatre Rituals', Peter Wilson (ed.), *The Greek Theatre and Festivals: Documentary Studies*, Oxford, 2007, pp. 48-66 を参照。

(26) Rigsby, Asylia, p. 180.

(27) Rigsby, Asylia, 124, ll.24-27.

た。アポロパネス、エウブロス、リュコメデスのテオロイ3名が訪れたエレトリアでは、テオロドコイが選出されている[28]。しかし、ポキス連合、アテナイ、カルキスでは彼らのためにテオロドコイが選出されることはなかった。ポキス連合のもとでは、彼らはポカルケス（οἱ Φωκάρχες/hoi phokarxes）と呼ばれる連合の公職者によって歓待を受けている。アテナイでも同様に、プリュタネイオンに招待することが決議されており、テオロイはポリスによって歓待されていた。カルキスの決議では、マグネシアのレウコプリュエネ祭にカルキスからテオロイを派遣することになったが、テオロドコイは指名されずマグネシア人テオロイは供儀において最初に犠牲獣の肉を受け取ることが決議されているのみである[29]。ペロポネソス半島を訪れた使節も、同様に異なる待遇を受けていた。メガロポリス、シキュオン、コリントスでは、彼らはプレスベイスとテオロイとして迎えられ、テオロドコイが指名されている。しかしアルゴスでは、布告に訪れた彼らはテオロイとしてエケケイリオン（τό ἐκεχείριον/to ekexeirion　移動の自由）を認められるにとどまる[30]。さらにメッセニアでは、彼らはプレスベイスと呼ばれるのみであり、特別の歓待を受けた様子もない[31]。以上のように、マグネシアからポリスを訪問した人物たちの扱いが各ポリスによって異なることは、個々のポリスがこの問題に関して主導権を発揮していたことをあらわすのであろう。ポリスはマグネシアとの関係を考慮に入れた上で、決議内容を独自に決定していたのと考えることができる。

3　ヘレニズム諸王からの応答

残された史料はわずかだが、ヘレニズム王朝の王たちも、マグネシアの要請に対して異なる対応をしていたことがわかる。先述したように、アッタロス1世、アンティオコス3世と彼の息子アンティオコスは、アルテミス・レウコプリュエネの祝祭がイソピュティオスと認める一方で、アシュリアについては沈黙している。他方で、プトレマイオス4世のもとを訪れた使節はアシュリアを求めたと思われる。彼からマグネシアに宛てた返答を記録していたとおもわれる箇所は破損しており、正確な情報を得ることはできないが、アシュリアを要請したことに言及しているため、おそらくマグネシアに対してアシュリアを認めたであろう[32]。

この相違はマグネシアが王たちの係争地に位置していたことから説明できるであろう。マグネシアにはアッタリスと呼ばれる部族が存在していたため、一時期ペルガモンの支配下にあっ

(28)　Rigsby, Asylia, 98, ll.33-34.

(29)　Rigsby, Asylia, 84, ll.34-35; Rigsby, Asylia, 87, ll.36-37; Rigsby, Asylia, 97, ll.24-27.　なおボイオティア連合の碑文は破損が激しく、彼らの待遇について判断することはできない。

(30)　Rigsby, Asylia, 90, ll.17-18.

(31)　Rigsby, Asylia, 93. 史料後半部分には、テオロイに対して何がしかのものを与えることが記録されている。しかし、メガロポリスの事例と異なり、彼ら3人はテオロイとして受け入れられておらず、文脈から今後祝祭期間中に訪れるテオロイに関する規定と読むべきである。

(32)　Rigsby, Asylia, 71, ll.20-24.

た。[33] しかし、前 208 年にマグネシアは、アッタロス 1 世のみならずアンティオコス 3 世、プトレマイオス 4 世に使節団を派遣していることから、外交的な自立性を保持していたと考えられる。アッタロス 1 世からの返答では、服属するポリスも彼の意思に従うと述べられていることからも、前 208 年の段階ではアッタロス 1 世とマグネシアが 1 対 1 で交渉をおこなう関係にあったことがわかる。[34]

同じくアシュリアに言及をしていないアンティオコス 3 世は、マグネシアに対していかなる意識をもっていたであろうか。アンティオコス 3 世は、前 212 年から前 204 年にかけて東方遠征を遂行している。彼はその後、前 204 年末から前 203 年春の間に小アジア東南のタウロス山脈を西に超えて、小アジアの再征服に乗り出した。[35] この年、小アジア東部から西部にかけて軍を進めた彼は、マグネシアの南東に位置したポリスのアミュゾンを破壊している。その直後、前 203 年 5 月頃にアミュゾン市民に宛てて送られたアンティオコス 3 世の書簡では、ポリスの安全と再建、さらに彼らアミュゾン人がプトレマイオス王の下で享受していたのと同じ権利を約束しつつ、従来の土地に留まるように勧めている。[36] そのため、アンティオコス 3 世が前 208 年にマグネシアの使節を迎え入れた時には、小アジア西部を再度獲得する意思があったにせよ、マグネシアにまで支配権が及んでいたとは考えにくい。

このようにアッタロス 1 世とアンティオコス 3 世にとって、マグネシアはかつての支配地であったとともに、再度支配下に収める予定地であった。つまり、マグネシアに対してアシュリアを認めてしまえば、将来軍事的行動をとった場合に約束を反故にしたとみなされる恐れがあったのであろう。アンティオコス 3 世は、前 3 世紀末にいくつかのポリスに対してアシュリアを授与している。[37] しかしそれはポリスを征服し、軍隊を駐留させて後のことであり、あくまで支配権が及んだポリスに対する恩恵としてであった。アンティオコス 3 世にとってアシュリアは、自らと支配ポリスとの間の垂直的な関係を維持する手段であったのであろう。前 208 年彼は東方遠征の途上にあり、小アジア遠征についてどのような計画をもっていたのかははっきりとしない。しかし、彼にとって小アジア西部は父祖から受け継いだ世襲財産であり、その地を再征服する視野はもっていたであろう。そのためアシュリアを認めることは、小アジア西部の再征服の障害になりえると判断されたのかもしれない。

---

(33) *I. Magnesia*, 89, ll.6-7. この碑文は前 3 世紀ないしは前 2 世紀、ディオニュソス芸人の結社による決議を記録したものであり、アルテミス・レウコプリュエネの祝祭に招待されたことに感謝し、ポリスとテオロイを顕彰している。

(34) Rigsby, Asylia, 68, ll.19-20.

(35) 前 3 世紀末のアンティオコス 3 世の再征服事業については、John Ma, *Antiochos III and the Cities of Western Asia Minor*, Oxford, 2000, pp. 63-73 を参照。

(36) Jeanne and Louis Robert, *Fouilles d'Amyzon en Carie*. Tome 1, *Exploration, histoire, monnaies et inscriptions* (= *Amyzon*), Paris, 1983, no. 9.

(37) Cf. Rigsby, 163（アラバンダ）; Peter Herrmann, 'Antiochos der Grosse und Teos', *Anadolu* 9, 1965, no. 1, 2= Ma, *op. cit.*, Appendix 2, documents 17, 18（テオス）; *Amyzon*, nos. 10, 11, 12（アミュゾン）; Francis Piejko, 'Letter of Eumenes II to Tralles Concerning Inviolability and Tax Exemption for a Temple. After 188 B. C.', *Chiron* 18 , 1988, pp. 55-69（トラリス）.

この2名とは異なり、プトレマイオス4世からの書簡では、アシュリアに関してマグネシアから要請があったことがふれられている。前263年から前197年までエジプトの支配下にあったエペソスやアミュゾンと異なり、プトレマイオス4世がマグネシアを実質的に支配していたのかどうかを直接判断することはできない[38]。しかし、少なくとも理念上は自らの支配領域ととらえていたとみなすことはできるであろう。

ポリュビオスによれば、前203年アンティオコス3世がタウロス山脈を越えた頃、エジプトの高官アガトクレスから各地に使者が派遣されている[39]。アンティオコス3世の下に赴いたペロプスの息子ペロプスは、プトレマイオス4世と彼が前217年に締結した条約を遵守するよう求めている[40]。マケドニアのピリッポス5世の下へ派遣された使者は、アンティオコス3世による条約侵犯が起こった場合には、援助してもらえるよう要請している。すなわち、マグネシアが属する同地域は、エジプトの領域としてアガトクレスは考えていた。前208年にプトレマイオス4世も同様の認識を持っていたのであろう。マグネシアに対するアシュリアは、プトレマイオス4世にとって支配地への恩恵であったのではないだろうか[41]。

このように、ヘレニズム諸王からの返答に相違がみられるのは、彼らがマグネシアに対して持っていた意識の現われだとみなすことができるであろう。アッタロス1世、アンティオコス3世にとって、マグネシアにアシュリアを認めることは、戦略上不利にはたらく可能性があった。それに対してプトレマイオス4世はマグネシアを支配地としてみなしていたため、アシュリアを認めることになんら矛盾を感じなかったのであろう。王にとってアシュリアは、支配ポリスに与える特権とみなされていたと言うことができる。

おわりに

以上駆け足であったが、マグネシアからのアシュリアと祝祭のパンヘレニズム化の要請と諸ポリス・王からの応答は、交渉に臨んだ各ポリス・王たちの思惑が錯綜していたヘレニズム時代の国家間関係を反映しているといえる。

マグネシア人にとってアシュリア認可とパンヘレニックな祝祭創設は、ポリスの威信と将来の繁栄をかけた大事業であったにちがいない。彼らはテオロイを各地に派遣し、個々のポリスと共有した文化的基盤を駆使して交渉に臨んだ。マグネシアにとってこの使節派遣は、精神的

(38) エペソスは前197年にアンティオコス3世によって征服されるまで、エジプト海軍基地であった。Cf. Polybios, 18.41a; Livius, *Ab urbe condita libri*, 33.20; 33.38.

(39) Polybios, 15.25.13-15.

(40) Polybios, 5.87.

(41) ピリッポス5世が小アジアに侵入した前201年には、マグネシアは自立したポリスであったようである。ポリュビオスによれば、ピリッポス5世はアンティオコス3世に小アジアの管理を任されていたシリアの高官ゼウクシスから補給を受けるとともに、ミュラサ、アラバンダ、マグネシアからも食料を提供された。これに感謝したピリッポスは、マイアンドロス川下流沿いのポリスであったミュウスを占領した後、この土地をマグネシア人に贈っている。Cf. Polybios, 16.24.

には各ポリスに自国との関係を再度想起させることができ、物質的にはテオロイの交換、プロクセノスの任命をおこない、ポリス間の結びつきを強化・再生産する手段であった。

諸ポリスと王は、マグネシアとの関係や地中海世界での自国の位置づけを考慮に入れ、決議を下した。あるポリスは祝祭のパンヘレニズム化を認めるかたわら、アシュリアについては沈黙を守った。またあるポリスは、マグネシアとの関係強化を望み、市民からテオロドコイを任命してマグネシア人テオロイを歓待し、祝祭に自国のテオロイを派遣することを決めた。さらには、テオロイとして訪問した使節をプロクセノスに任命し、祝祭以外の窓口からも関係を構築していった場合もあった。ヘレニズム諸王はマグネシアと王朝との関係と将来の戦略を念頭に置いた上で、応答をおこなっていた。

さらには、使節派遣はポリスにおける有力者の地位確保とポリスを越えた個人的な結びつきをも生み出したであろう。古代ギリシアにおいて国家間の外交は、有力な家系や個人に依存する傾向があった。派遣されてきたテオロイを歓待する役目を担ったテオロドコイは、富裕な市民の中から選出されていた。プロクセノスとして指名された人物は、他ポリスから名誉を授けられ、そのポリスの市民を自国で歓待し、国家間交渉の場では仲介役として活躍することが期待されていた。祝祭創設とアシュリア要請を契機とした使節派遣は、ポリスの富裕市民が他国の有力者と人脈を形成し、自国においては権威を向上させることもあったであろう。彼ら富裕市民にとって使節として派遣されることは、ポリスに対して協力的な自己の姿を競い合い、表出させる機会でもあった。このように、マグネシアのアシュリア史料からうかがい知ることができるのは、ヘレニズム時代の多元的な国家間交渉とそれが創造・維持していく国家間・個人間の紐帯である。

このマグネシアへのアシュリアをギリシア人がどれだけ尊重したのかを測ることはできない。しかし、ローマ帝政期にはいった後 22 年ギリシア諸ポリスからローマ元老院へ、アシュリアの維持を嘆願しにおとずれた使節団の中には、マグネシアからの使節も含まれていた。タキトゥス『年代記』によれば、彼らはローマ人のルキウス・スキピオとルキウス・スッラによってもアシュリアが承認されたと主張している[(42)]。これは、マグネシア人たちが前 208 年以降、アシュリアを外交の 1 手段として折に触れて利用してきたことを示唆する。彼らにとって前 208 年の使節団派遣が、ポリスの戦略上大きな意義をもったことのあらわれであろう。加えて、アシュリアは祝祭に関連して要請されただけではなかった。パンヘレニックな祝祭が開催されていない諸ポリスによっても、アシュリアが求められる事例をみとめることができる。前 3 世紀末と前 2 世紀半ば、テオスによる 2 度の使節派遣がその 1 例である。ヘレニズム時代においてアシュリアが国家間交渉にいかなる意義をもったのか、マグネシアの事例とあわせて、他の事例も検討していく必要があろう。本稿で取り上げることができなかったが、今後論を進めていく予定である。

---

(42)　Tacitus, *Annales*, 3.62.1.

※本稿の執筆にあたっては、独立行政法人日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の支援を受けた。

史料	受け入れポリス・王	第 1 使節	第 2 使節	第 3 使節	使節	テオロドコイ指名の有無
I. Magnesia, 18=Rigsby, Asylia, 69	アンティオコス 3 世（シリア）	リュキデウスの息子デモポン	ピリアスの息子ピリストス	ペレスの息子ペレス	テオロイ	
I. Magnesia, 19=Rigsby, Asylia, 70	アンティオコス（シリア）	リュキデウスの息子デモポン	ピリアスの息子ピリストス	ペレスの息子ペレス	テオロイ	
I. Magnesia, 61=Rigsby, Asylia, 111	ペルシスのアンティオキア	リュキデウスの息子デモポン	ピリアスの息子ピリストス	ペレスの息子ペレス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 25=Rigsby, Asylia, 73	ボイオティア連合	アイスキュロスの息子アポロパネス	アナクサゴラスの息子エウブロス	カリシオスの息子リュコメデス	不明	
I. Magnesia, 34=Rigsby, Asylia, 84	ポキス連合	アイスキュロスの息子アポロパネス	アナクサゴラスの息子エウブロス	カリシオスの息子リュコメデス	テオロイ	
I. Magnesia, 37=Rigsby, Asylia, 87	アテナイ	アイスキュロスの息子アポロパネス	アナクサゴラスの息子エウブロス	カリシオスの息子リュコメデス	テオロイ	
I. Magnesia, 47=Rigsby, Asylia, 97	カルキス	アイスキュロスの息子アポロパネス	アナクサゴラスの息子エウブロス	カリシオスの息子リュコメデス	テオロイ	
I. Magnesia, 48=Rigsby, Asylia, 98	エレトリア	アイスキュロスの息子アポロパネス	アナクサゴラスの息子エウブロス	カリシオスの息子リュコメデス	テオロイ	○
SEG, 12.217 =Rigsby, Asylia, 79	デルポイ	ディオクレスの息子アリストデモス	ゴルガソスの息子アリステアス	コロティオンの息子アンテノル	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 31=Rigsby, Asylia, 81	アカルナニア連合	ディオクレスの息子アリストデモス	ゴルガソスの息子アリステアス	コロティオンの息子アンテノル	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 32=Rigsby, Asylia, 82	エペイロス連合	ディオクレスの息子アリストデモス	ゴルガソスの息子アリステアス	コロティオンの息子アンテノル	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 35=Rigsby, Asylia, 85	サメ	ディオクレスの息子ソシクレス	ディオクレスの息子アリストデモス	メノピロスの息子ディオティモス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 36=Rigsby, Asylia, 86	イタカ	ディオクレスの息子ソシクレス	ディオクレスの息子アリストデモス	メノピロスの息子ディオティモス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 44=Rigsby, Asylia, 94	コルキュラ	ディオクレスの息子ソシクレス	ディオクレスの息子アリストデモス	メノピロスの息子ディオティモス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 45=Rigsby, Asylia, 95	アポロニア	ディオクレスの息子ソシクレス	ディオクレスの息子アリストデモス	メノピロスの息子ディオティモス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 46=Rigsby, Asylia, 96	エピダムノス	ディオクレスの息子ソシクレス	ディオクレスの息子アリストデモス	メノピロスの息子ディオティモス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 38=Rigsby, Asylia, 88	メガロポリス	ピュタゴラスの息子ピリスコス	ディオニュシオスの息子コノン	ピュタゴラスの息子ランペトス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 39=Rigsby, Asylia, 89	アカイア連合	ピュタゴラスの息子ピリスコス	記載なし	記載なし	プレスベイスとテオロイ	
I. Magnesia, 40=Rigsby, Asylia, 90	アルゴス	ピュタゴラスの息子ピリスコス	ディオニュシオスの息子コノン	ピュタゴラスの息子ランペトス	プレスベイスとテオロイ	
I. Magnesia, 41=Rigsby, Asylia, 91	シキュオン	ピュタゴラスの息子ピリスコス	ディオニュシオスの息子コノン	ピュタゴラスの息子ランペトス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 42=Rigsby, Asylia, 92	コリントス	記載なし	記載なし	ピュタゴラスの息子ランペトス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 43=Rigsby, Asylia, 93	メッセニア	ピュタゴラスの息子ピリスコス	ディオニュシオスの息子コノン	ピュタゴラスの息子ランペトス	プレスベイス	
I. Magnesia, 78=Rigsby, Asylia, 124	不明	ピュタゴラスの息子ピリスコス	記載なし	記載なし	プレスベイス	○
I. Magnesia, 76=Rigsby, Asylia, 122	不明	ピュタゴラスの息子ランペトス？	ディオニュシオスの息子コノン？	ピュタゴラスの息子ピリスコス？	不明	

I. Magnesia, 49=Rigsby, Asylia, 99	デロス	アンピストラトスの息子デメトリオス	カリポンの息子モロッソス	イピクラテスの息子カリクラテス	不明	
I. Magnesia, 50=Rigsby, Asylia, 100	パロス	カリポンの息子モロッソス	アンピストラトスの息子デメトリオス	イピクラテスの息子カリクラテス	テオロイ	○
I. Magnesia, 55=Rigsby, Asylia, 104	ロドス	パニアスの息子ランポン	ディアゴラス	ピュトデモス	不明	
I. Magnesia, 56=Rigsby, Asylia, 105	クニドス	パニアスの息子ランポン	記載なし	記載なし	不明	
I. Magnesia, 57=Rigsby, Asylia, 106	コス	パニアスの息子ランポン	ディアゴラス	ピュトデモス	不明	
I. Magnesia, 58=Rigsby, Asylia, 107	不明	パニアスの息子ランポン	不明	記載なし？	プレスベイス？	
I. Magnesia, 79+80=Rigsby, Asylia, 125	ピシディアのアンティオキア (?)	リュコメデスの息子リュコメデス	デモポンの息子デメトリオス	アナクサゴラスの息子ディオニュサルコス	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 81=Rigsby, Asylia, 126	アンティオキア (?)	リュコメデスの息子リュコメデス	デモポンの息子デメトリオス	アナクサゴラスの息子ディオニュサルコス	テオロイ	
IG IX. I2 4.c=Rigsby, Asylia, 67	アイトリア連合	ムナシプトレモス	ヒッポニコス	記載なし	プレスベイス	
I. Magnesia, 22=Rigsby, Asylia, 68	アッタロス 1 世（ペルガモン）	ピュティオン	リュコメデス	記載なし	不明	
I. Magnesia, 23=Rigsby, Asylia, 71	プトレマイオス 4 世（エジプト）	ディオペイテス	イタリデス	記載なし	プレスベイス	
I. Magnesia, 33=Rigsby, Asylia, 83	ゴンノイ	クラティノスの息子ディアゴラス	ヘルモナクスの息子ゾピュロス	リュコメデスの息子ディオティモス	不明	○
I. Magnesia, 52=Rigsby, Asylia, 101	ミュティレネ (?)	不明	ディオニュシオス	不明	不明	
I. Magnesia, 53=Rigsby, Asylia, 102	クラゾメナイ	ディオニュシオスの息子ディオメドン	ネアイトスの息子ネアイトス	ポリュアルコスの息子メネクラテス	テオロイ	○
I. Magnesia, 54=Rigsby, Asylia, 103	ディオニュソス芸人	カリシオスの息子ピュトドトス	アガリストスの息子エピクロス	ピュロニデスの息子プリュタニス	プレスベイス	
I. Magnesia, 62=Rigsby, Asylia, 112	不明	不明	不明	ヒッピアス？の息子 … コス	不明	
I. Magnesia, 63=Rigsby, Asylia, 113	不明	不明	パルメニオン？の息子 … アルコス	記載なし？	不明	
I. Magnesia, 70=Rigsby, Asylia, 118	不明	テオドトス	不明	記載なし？	プレスベイス	
I. Magnesia, 72=Rigsby, Asylia, 120	シラクサ	メノピロスの息子ディオティモス	アリステアスの息子	記載なし？	プレスベイスとテオロイ	○
I. Magnesia, 82=Rigsby, Asylia, 127	不明	ゼノドトスの息子ピレノル	ピュロニデスの息子プリュタニス	記載なし？	テオロイ	
I. Magnesia, 83=Rigsby, Asylia, 129	トラリス	マンドロクレスの息子ニコデモス	マンドロクレスの息子ニコデモス	ディアゴラスの息子イサゴラス	プレスベイスとテオロイ	
I. Magnesia, 87=Rigsby, Asylia, 131	アッタロス朝支配下のポリス	レオンティスコス	アポロニオス	記載なし	プレスベイスとテオロイ	○
SEG, 12.217=Rigsby, Asylia, 78	アイトリア連合	不明	不明	不明	プレスベイス	
I. Magnesia, 86=Rigsby, Asylia, 130	アッタロス朝支配下のポリス	不明	不明	不明	テオロイ	
I. Magnesia, 24=Rigsby, Asylia, 72	不明	不明	不明	不明	不明	
I. Magnesia, 25c=Rigsby, Asylia, 74	不明	不明	不明	不明	不明	

***I. Magnesia*, 26=Rigsby, Asylia, 75**	ラリサ (?)	不明	不明	不明	テオロイ	○
***I. Magnesia*, 27=Rigsby, Asylia, 76**	不明	不明	不明	不明	不明	○
***I. Magnesia*, 28=Rigsby, Asylia, 77**	カリュドン	不明	不明	不明	不明	○
***I. Magnesia*, 30=Rigsby, Asylia, 80**	不明	不明	不明	不明	不明	
***I. Magnesia*, 73b=Rigsby, Asylia, 108**	不明	不明	不明	不明	プレスベイス	
***I. Magnesia*, 59=Rigsby, Asylia, 109**	リュコス川近郊ラオディケイア	不明	不明	不明	プレスベイス	
***I. Magnesia*, 60=Rigsby, Asylia, 110**	不明	不明	不明	不明	不明	
***I. Magnesia*, 64=Rigsby, Asylia, 114**	不明	不明	不明	不明	プレスベイス？とテオロイ	
***I. Magnesia*, 66=Rigsby, Asylia, 115**	不明	不明	不明	不明	テオロイ	
***I. Magnesia*, 68=Rigsby, Asylia, 116**	不明	不明	不明	不明	テオロイ	
***I. Magnesia*, 69=Rigsby, Asylia, 117**	不明	不明	不明	不明	テオロイ	
***I. Magnesia*, 71=Rigsby, Asylia, 119**	不明	不明	不明	不明	不明	
***I. Magnesia*, 74=Rigsby, Asylia, 121**	不明	不明	不明	不明	不明	
***I. Magnesia*, 77=Rigsby, Asylia, 123**	不明	不明	不明	不明	不明	
***I. Magnesia*, 83=Rigsby, Asylia, 128**	アッタロス朝支配下のポリス	不明	不明	不明	不明	

表：マグネシアから各ポリスに派遣された使節団　Sosin, ‘Magnesian Inviolability’, *Transactions of the American Philological Association* 139, pp.394; Rigsby, Asylia, 69-131 をもとに作成。